

鼻と唇



ひろし

唇 タツノスケ

渋沢道場師範の唇といえば登米界隈で知らない者はいない。上唇の厚みが3cmほどあり下唇は大きすぎて顎の下まで垂れ下がっている。まるで天上舐めのような妖怪がその舌をベロンと出しているかのように見えるのだが師範のそれは紛れもなく唇である。

60歳間近になった師範は先代である父親の影響で幼少の頃から鍛錬を重ね、その甲斐あって腕っ節は強かった。地方の大会では負け知らずで、全国でも活躍できる力と技術を身に付けていたのだが彼は大きな大会へ参加することは無かった。どうしても唇が恥ずかしく、地方ならまだしも全国大会にその姿を露見させる勇気が無かったからだ。中学、高校と進学し新たな人と出会う度に陰でコソコソと唇を笑われているような気がし、師範は彼らと交流を深めようとはせず、学校が終わるとすぐに帰宅し毎日稽古に励んだ。しかしそれが何の解決をもたらすわけでもなく、現に師範に上り詰めた今日も唇に悩まされている。表面上ではさほど気にしていない顔をしている。これは渋沢道場師範なるものが唇にクヨクヨ悩んでいては格好がつかないと思ったからではない。それよりむしろ自分で唇を気にしているという事を人に知られるのが嫌だったからである。師範は日常の会話の中に唇という言葉が出てくるのを何より恐れていた。

師範はこの唇を持て余していた。実際的に長い下唇が不便だった。夏場は内側に汗をかく。冬場は表面が乾燥して荒れる。ご飯を食べる時は噛む度に、ジョギングの際に一步踏み出す度に、または道場でエイヤ！と拳を突き出す度に唇がパタパタと動く。説教をした時などはあまりにもブルブルパタパタ動くので怒りが落ち着く頃には顎が唇に打たれて赤く変色している。とはいってもその顎は長い唇によって隠れてしまうので他人から見えることはない。

師範は唇を気にしていないふりをしながらも人に会えば、さてこの人の唇はどのようなものかとつい見てしまう。伝記を読んで書かれている内容よりも、過去の偉人に大きな唇をもった人がいなかったかを探してしまう。しかし鱈子唇はあっても下唇が顎の下まで垂れ下がっている人物は載っていなかった。唯一似たような境遇である禅智内供の鼻と自分の唇と比べて、どちらが楽なものかと真剣に考えたりもしたが比べようにも禅智内供は話の中の人物であって実存していたとしても鼻が大きかったのかどうかもわからない。しかしこちらの唇は紛れもなく現実である。ものは試しと禅智内供のように烏瓜を煎じて飲んだり鼠の尿を唇に摺りこんだりしたが結果は禅智内供同様何も変わらなかった。何度も試みては鏡を見、相変わらず堂々と顔の下部分に居座っている唇を確認したまや駄目だったかという虚しさが残るばかりだった。

勿論禅智内供の鼻に効果があった方法も試した。唇を茹でて、ある程度茹であがった唇を愛弟子に踏んでもらった。熱さと痛みを我慢して何度も繰り返した結果、唇は腫れあがっただけだった。鼻のようにはいかないものだと言った通り痛感した。

禅智内供は鼻が短くなった後、周囲の目が益々鼻に向けられ元の鼻が恋しくなったという。果たして自分も同じような気持ちになるのだろうか。師範は考えた。この唇が短くなりこれで堂々と人様の前に出られると安堵した後、変わる世間の眼差しに嫌気を感じ大きな唇が恋しくなるのだろうか。現在プチ整形というものがあるらしいが二重瞼にしたり鼻を高くしたり皺を取ったりした人は元の顔が懐かしくならないのだろうか。師範はふと気になりインターネットで検索して

みた。

「プチ整形 後悔」

ずらっと表示された検索結果をみると整形後に後悔している人は少なからずいるようだ。そしてその殆どが手術費用云々ではなく、周囲の視線が冷ややかに感じると戸惑っているらしい。しかし当事者を直接見たわけでもなく直接聞いたわけでもないので実際はどうかかわからない。インターネットというものは当てになるようではない。さてどうしたらいいものか。今まで何度も悩んだが良い結論には辿り着かなかった。これまでの人生でこの同じ悩みを繰り返してはどれだけ時間を使い無駄にしてきたのだろうか。答えが出ないことは散々わかっているのに悩んでしまう。もはや食事、排便に次ぐ自然の摂理であり、悩むことに悩むのも無駄なことなのだ。

あれこれ考えているうちに脳が休息を求め始め瞼が重くなってきた。床に転がり目を閉じ、やがて訪れる夢の手前で師範は思う。もし私が物書きで自分の人生を題材にするのであればこれほど面白い話はあるまい。記憶にある幼き日々から今までのことを正直に綴っただけでそれを読んだ多くの人が笑い転げるだろう。実際にその唇が見たいと訪ねてくる人もいるだろう。あの話は本当か、この話は本当かと聞かれては本当だと答え笑い者にされる。自らが曝け出したのだからそれでも構わない。どうせ笑われるなら腹の底から笑っていただこう。それで人が満足するのであれば、それで嫌なことを一瞬でも忘れることができるのであれば、自分の容姿より劣った人を見て生きる気力が湧くのであれば、この唇の存在価値はある。唇を通して自分の存在価値を高めることができるだろう。

師範は心地良い眠気に身をゆだねた。

ふと気が付くと少しばかり陽が傾き先ほどまでの暑さを失っていた。窓の外からは友達とじゃれあう小学生の声が聞こえる。どうやら1時間ばかり眠っていたらしい。眠気覚ましに顔を洗おうと洗面所に行き洗面器に水を汲んだ。溜まった水にタオルを入れ、ふと鏡を見た。数秒後その鏡には師範の驚いた顔が写っていた。あるべきものがなくなっていた。あの唇が見当たらない。いや唇は確かに有るのだが顎下までだらしなくぶら下がっているのではなくきちんと口元に収まっていた。本来なら嬉しいことなのだが、急な出来事すぎて戸惑いの方が大きかった。そして師範はふと禅智内供の例を思い出し不安になった。この顔を見た人はどんな反応をするだろうか。驚きを表情に出さずとも、昨日まであった唇を思い浮かべては今日の顔と重ね不思議に思うに違いない。尤も不思議に思われても仕方がない。本人の師範でさえ何故このような事態になったのかわからないのである。師範は陰でコソコソと笑われる自分を思い浮かべ寒気を感じた。

いつまでも洗面所に籠っていても解決しないので一度部屋に戻ろうかと廊下に出た時、玄関に人影が見えた。唇を見られるのは不味いと師範が気がつく間もなくドアがガラガラと開けられる。半歩入り込んできたのは二軒隣のあつつあんだった。回覧板を手にしたあつつあんなは師範を見るや手を挙げ「おう今日は稽古休みがあ？」と言葉を発した。師範は「んだ」と一言だけ答えた。この時師範は唇を隠してはいなかった。そこには一種の開き直りのようなものと、この唇への反応を見てみたいという好奇心があった。しかしながらあつつあんなは表情を少しも変えることなく「んじゃまだくっから」と言い玄関を出て行った。戸惑いの顔をされるのを覚悟していた師

範だったがこれには大いに肩透かしを食らった。あつつあんは気づかなかったのだろうか。いやそんなはずはない。確かにしっかりと目が合ったしあれほど堂々とした唇が無くなっていることに気付かぬはずはない。もしや自分は鏡で幻覚を見たのだろうか。師範はもう一度口に手をやったが顎を覆う唇の存在は無かった。

その後あれこれ迷った末に外に出てみることにした。馴染みの魚屋、八百屋の前を通り十字路を左に折れ北上川沿いの土手に着く。先日まで降り続いた雨でいつもより水嵩が増している。ここへくる途中で3人ばかりと擦れ違った。皆一様に一言二言挨拶をしてきただけでこの唇を見て変わった反応をする者はいなかった。いや、唇すら見られていない。どんなに長い付き合いの友にでさえ顔を合わせた時にはまず唇を見られるのに。少し遅れて目と目が合うのがこれまでの常だった。一瞬の間もなく目が合うことに師範は違和感を感じざるを得なかった。あの唇は先ほどまで存在しており一時の眠りの後無くなっていた。眠っている最中にこの体になにかしらの変化が起きあの唇が無くなったのだろうか。そうだったとしても町人は反応を見せてくれてもいいはずだ。思い切って直接尋ねてみるべきだろうか。しかしそれもまた恐ろしい。真実とは知るも知らぬも恐ろしいのだ。師範は流れゆく川を眺めながらあれこれ長く頭を悩ませていたが結局良い考えは浮かんでこなかった。

それから3日程経ち、何人もの人と会い多くの言葉を交わしたが誰一人として唇を見なかった。いや一度挨拶しようとした刹那、ちらっと唇を見られた時があった。その久しぶりの空気に懐かしさを感じながらも鼓動が高ぶった。しかし次に発せられた言葉を聞いて単に昼に掻っ込んだご飯粒が口元についていただけだと知った。師範は安堵するとともに少しばかりの物足りなさを感じた。そしてそれは日々蓄積し徐々に師範を苦しめ、やがて人と接することが嫌になった師範は自分から外出することがなくなっていった。

現在、渋沢道場師範の唇といえば登米界限で知らない者はいない。上唇の厚みが3cmほどあり下唇は大きすぎて顎の下まで垂れ下がっている。まるで舌をベロンと出しているかのように見えるのだが間違いなく唇である。と言っても本物の唇ではない。人工の大きな唇を本来あった唇にわざわざ整形して取り付けたのだ。師範のこの奇抜な行為に当時はお祭り騒ぎとなった。理解できるものがあるはずもなく、満足しているのは張本人の師範本人だけだった。最初こそ手間をかけて醜い唇にした者がいると流行り話になったが今ではそんな話をするものはいない。師範は会う人皆がまず唇に目をやるのを心地良く思っていた。

師範は時々思う。なぜあの時、唇が無くなったのだろうか。恨めしく思っていた唇だったが跡形もなく消え去った。人はそのことに何も反応を示さなかった。私は本当に大きな唇を持っていたのだろうか。元々ごく普通の唇だったのではなからうか。おかしい夢を見ていたのではなからうか。しかし幼き時からの唇の感触とそれに纏わる記憶はしっかりと残っている。ならば唇がなくなったのが夢か。もしそうだとするならば今は夢の延長線上に生きていることになる。どちらにせよ、私はこの唇に満足しているということだけは真実である。

ふと気が付くと少しばかり陽が傾き先ほどまでの暑さを失っていた。

祐二は書き終えてタイトルについて考えた。「唇」でいいのだろうか。明らかに「鼻」のパクリである。しかしこれは芥川龍之介へのリスペクトである。...と言えはなんとかなりそうだ。とりあえず書き終えたから一息つきたい。コーヒーでも飲んで推敲しようとキッチンに向かった。

昨日買ったインスタントコーヒーの封を開けると良い香りが祐二を包んだ。3日と持たないこの香り。お気に入りのコーヒーカップに少し多めに粉を入れ、お湯を注いでその場で一口飲んでみる。熱い。ちょっと濃くしすぎた気がする。まあいいや。もう一度カップに口をつけ二口目を飲んだ後軽く溜息をついた。

しかしこの唇はコーヒーを飲むのも厄介だな。